

内視鏡ロボで成功

岡山大病院
国内初

身体の負担減

岡山大病院（岡山市北区鹿田町）で17日、内視鏡ロボットを使い、体内で病気の腎臓を切り取つて別の場所に移植する「自家腎移植」が行われ、無事成功した。傷口が小さく、出血が少ないと患者の身体的負担が軽いのが特長で、ロボットによる自家腎移植は国内初。高度な操作技術が求められるため、同様の手術は世界でも数例しか報告がないという。

同大病院泌尿器科（那須保友教授）によると、患者は、左の尿管が細くなる尿管狭窄症（ハイドロニエヌス）を患う30代女性。ロボットによる手術では、下腹部に7カ所の小さな穴を開け、複雑で繊細な動きができるアーム付きの器具を体内に挿入。3次元画像で確認しながら電気メスなどを遠隔操作して尿管の右下腹部に移植した。

女性は、約10年前に受け

たが軽いのが特長で、ロボットによる自家腎移植は国内初。高度な操作技術が求められるため、同様の手術は世界でも数例しか報告がないという。

内視鏡ロボットは、同大病院が手術支援用として2010年に導入した「ダ・ビンチ」で、これまで前立腺がんの全摘出手術などで実績を積んできた。執刀した荒木元朗講師は「腎がんなどの疾患にも有効な手術。これまで体への負担を理由に敬遠していた患者にとって朗報となる。症例を重ね、手術時間の短縮を図つていきたい」と話した。

(C) 山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。